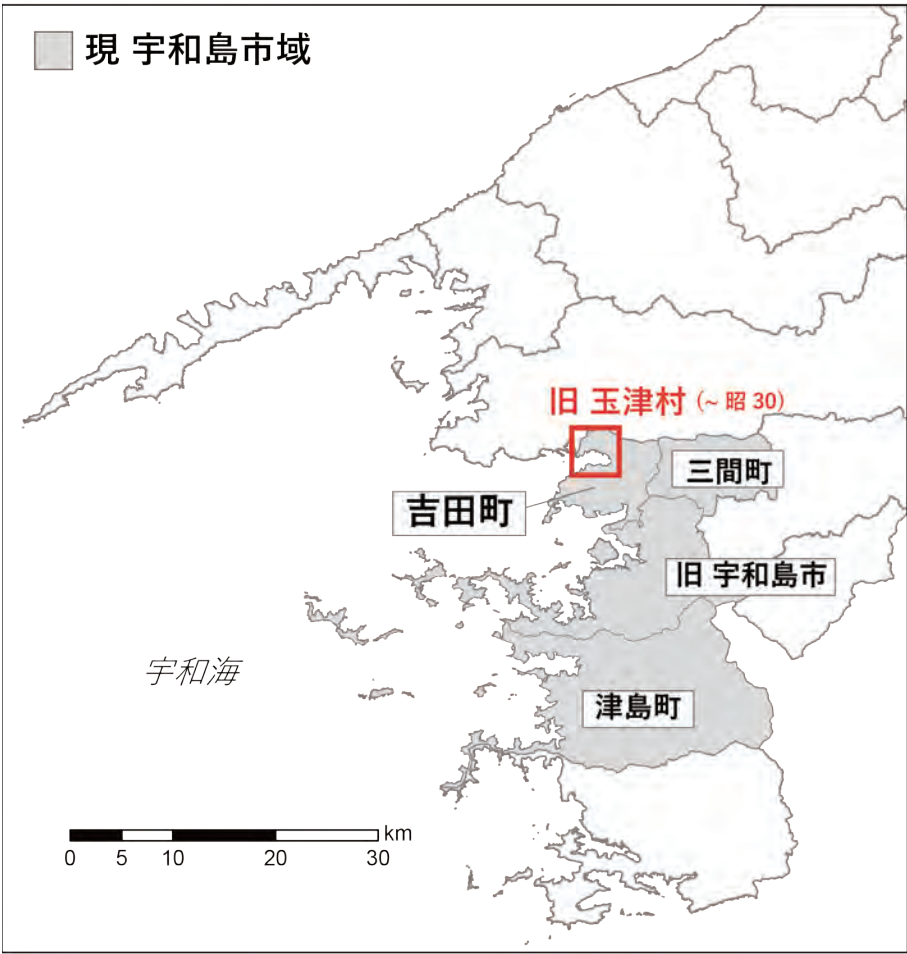


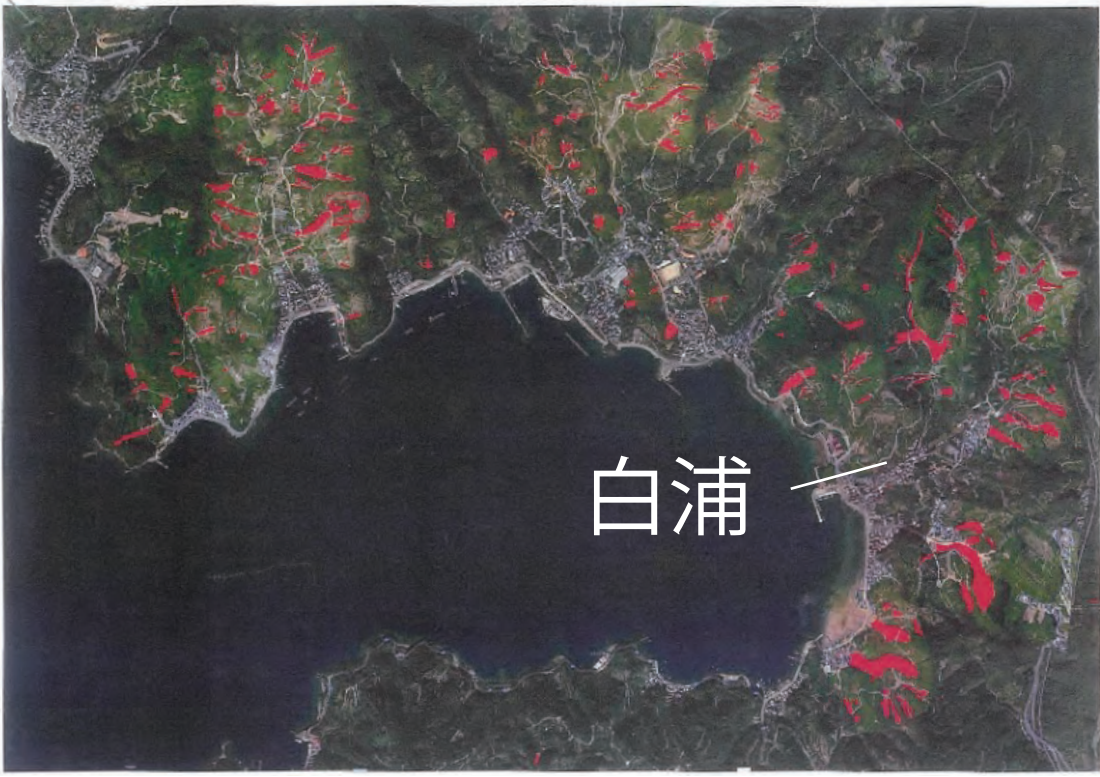
白浦再耕

愛媛県宇和島市玉津地区白浦における南海トラフ地震事前復興

玉津・白浦の概況



宇和島市：
・愛媛県南西部，南予地域の中心都市
・人口約 75000 人（令 1）
玉津地区白浦：
・宇和島市中心部から約 10 km
・玉津地区人口約 1500 人（令 1）
・全国有数のみかん産地
・平成 30 年西日本豪雨により甚大な土砂災害
・南海トラフ地震では最大津波浸水 10m が想定

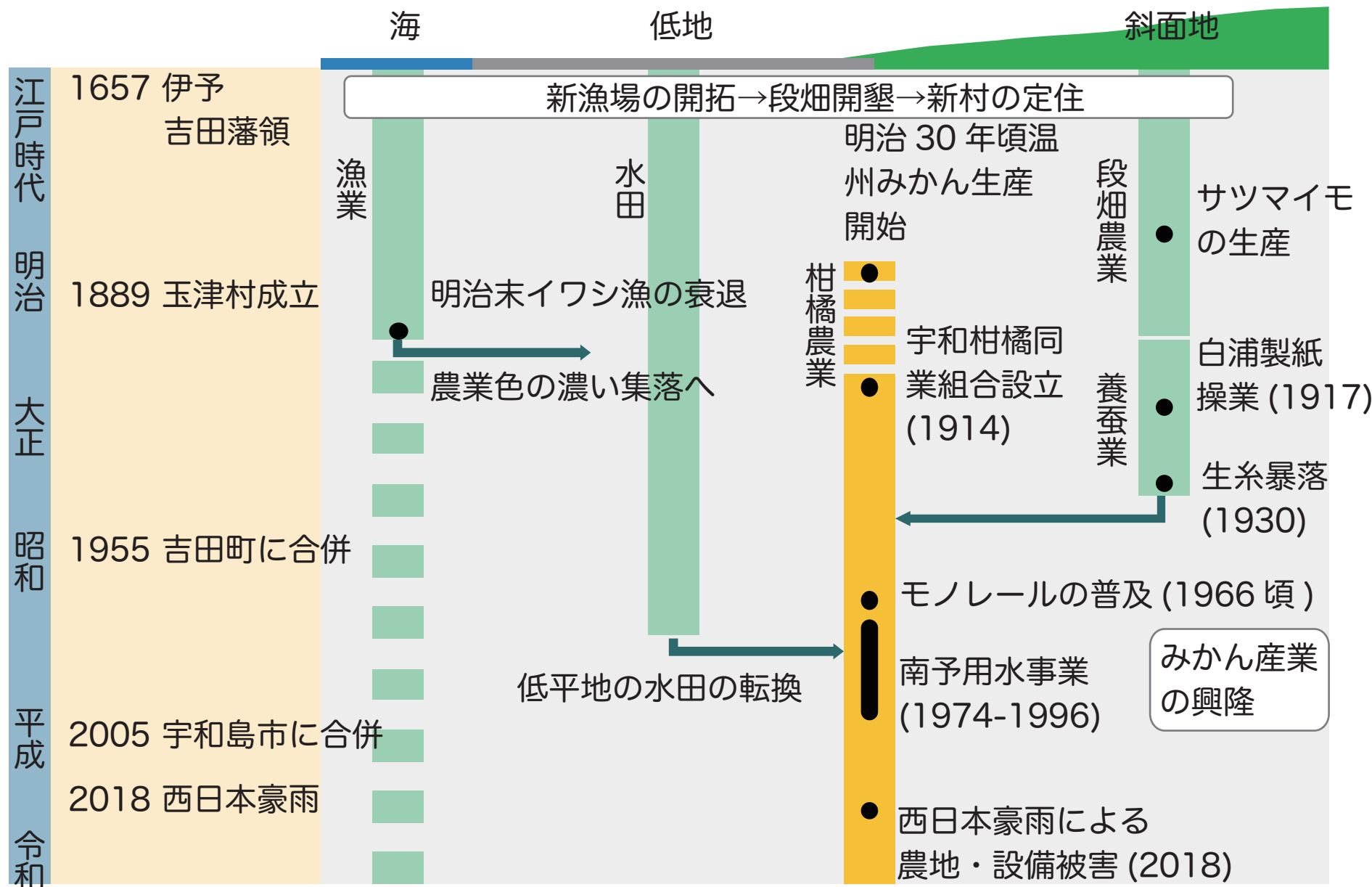


2018 年に発生した西日本豪雨では 100ha のみかん農園が土砂崩れ等の被害を受けた。

西日本豪雨による被害も踏まえつつ，来たるべき南海トラフ地震へ備えた事前復興計画の重要性

少子高齢化，人口流出による地域の担い手の減少といった地域課題の解決

玉津・白浦の歴史



漁場開拓によって定住が進んだ漁村集落から，産業構造の移り変わりを経て柑橘農業主体の集落へと変容。時代ごとに段畑の利用も変化し，モノレールやスプリンクラーなど柑橘農業用の設備が普及。

地域資源 字ごとに多様な生活景が垣間見える



脇中島
家々の隙間には、井戸端会議ができるような共有スペースが点在する。

日の平
石垣の上に住宅がある。山に近く，高低差がよく感じられる。

奥
石垣の上に住宅がある。さらに道が狭く，家が近い印象を受ける。

先新浜
県道と海に面した地区。玄関口が海を向いた家が多く，開放感がある。

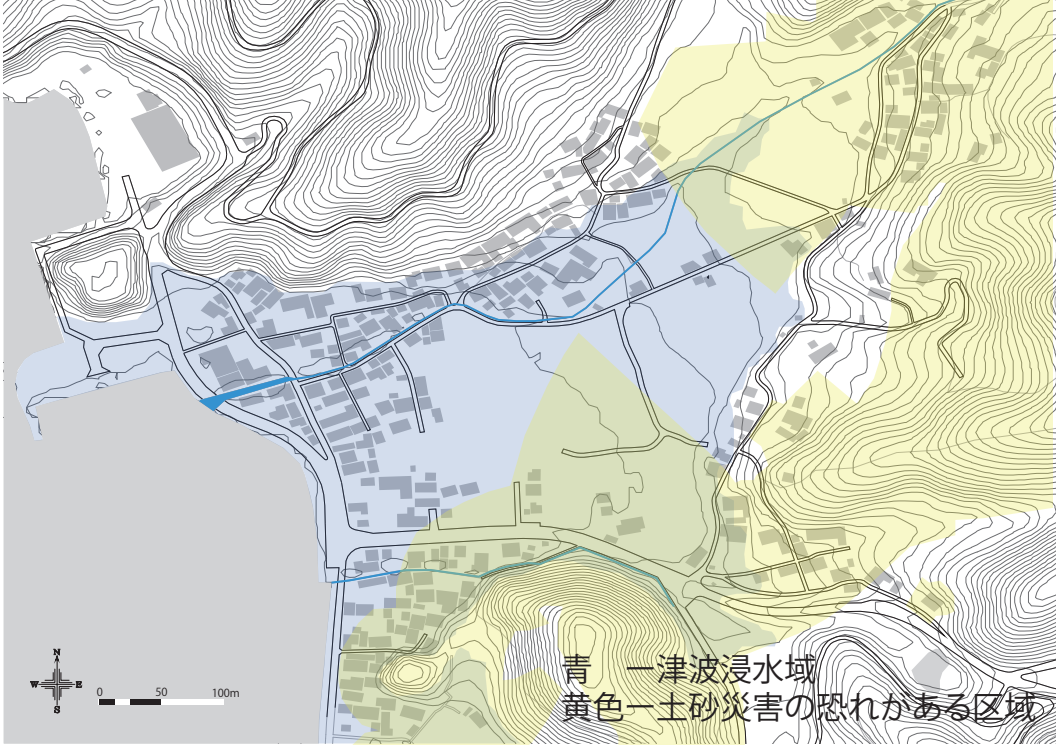
神社
ひっそりと佇む神社だが，行事の際には地区住民が集まる。

農道
山に張り巡らされている。みかん畑，集落，海という，白浦の美しい景色が見える。

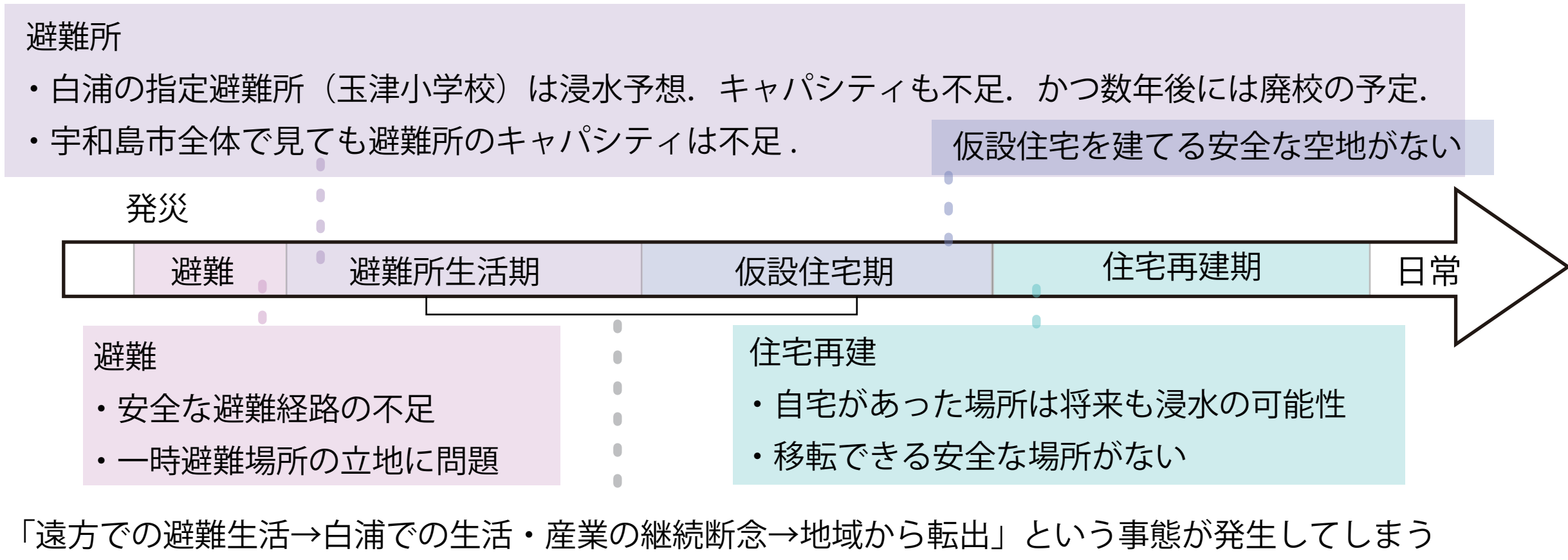
課題

災害に脆弱な地形

急峻で平地の少ない地形。可住域のほとんどが南海トラフ地震による津波浸水が予想されるうえ，土砂災害危険区域も広範囲に及び，複合災害への安全性が脆弱。



時間軸上の課題

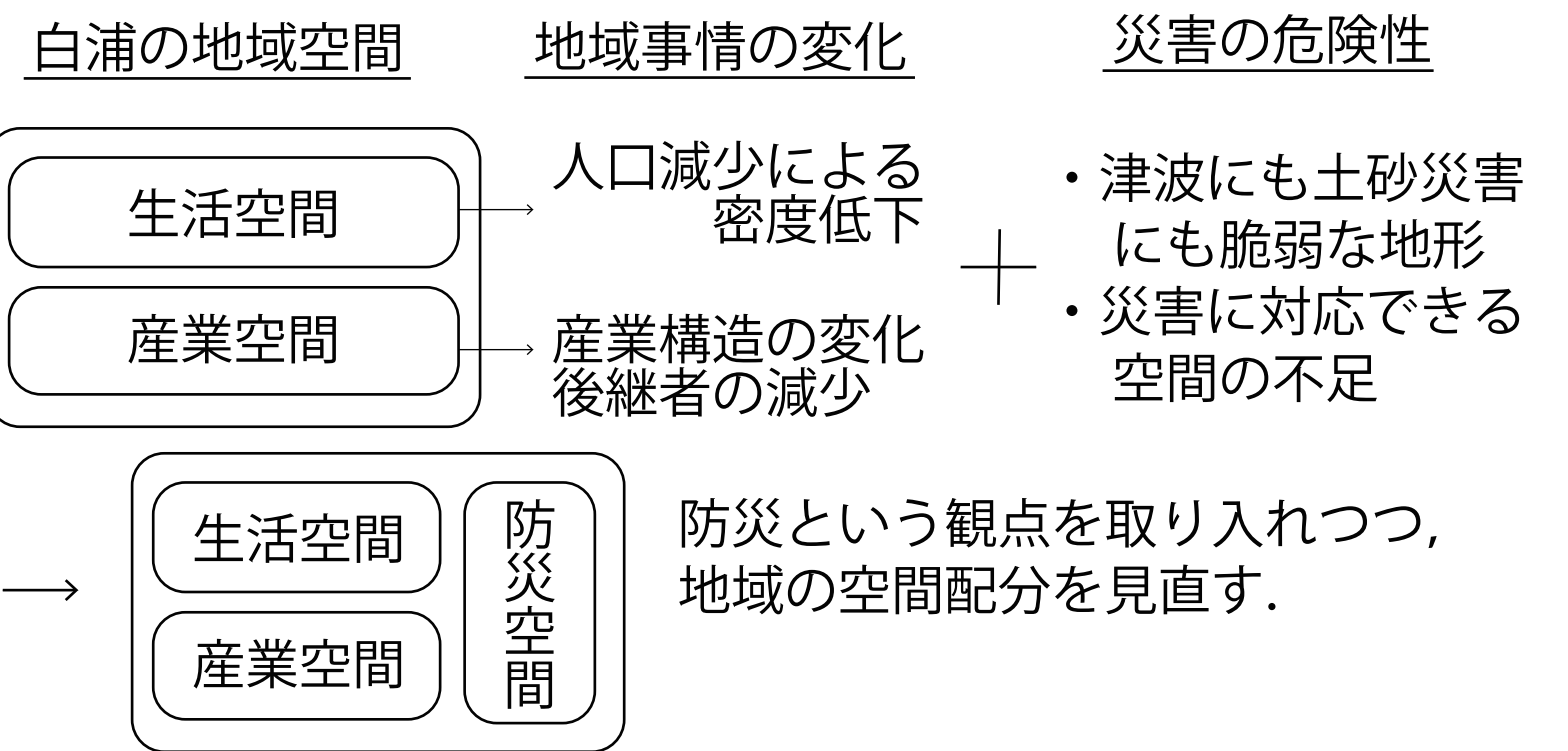


「遠方での避難生活→白浦での生活・産業の継続断念→地域から転出」という事態が発生してしまう

コンセプト

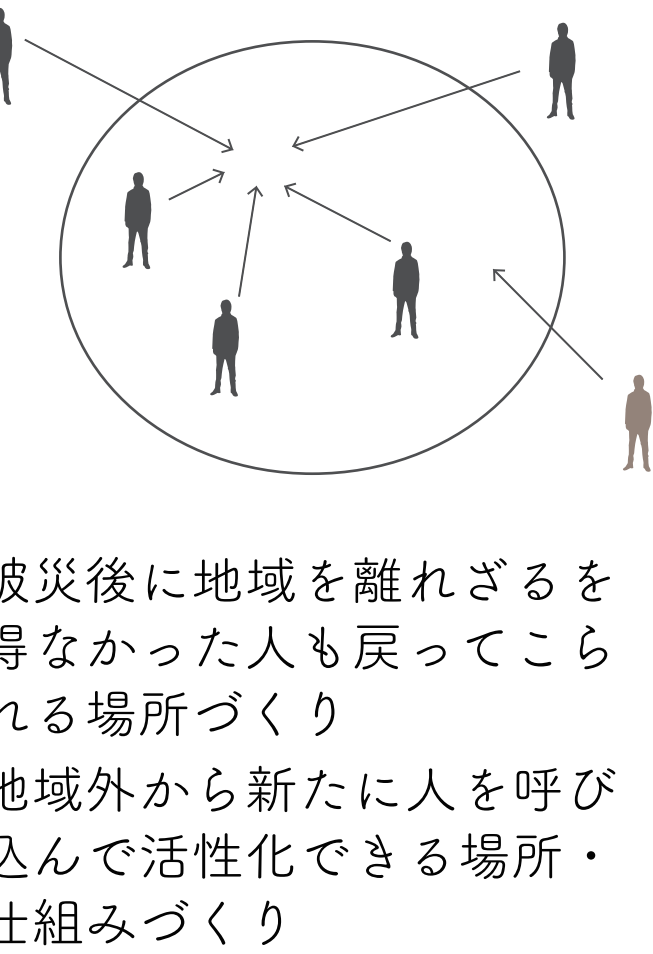
人のつながりを肥やしとしつつ土地に手を加えることで，白浦をさらに豊かな土地に変えていく。

土地 ～白浦の土地利用再配分～



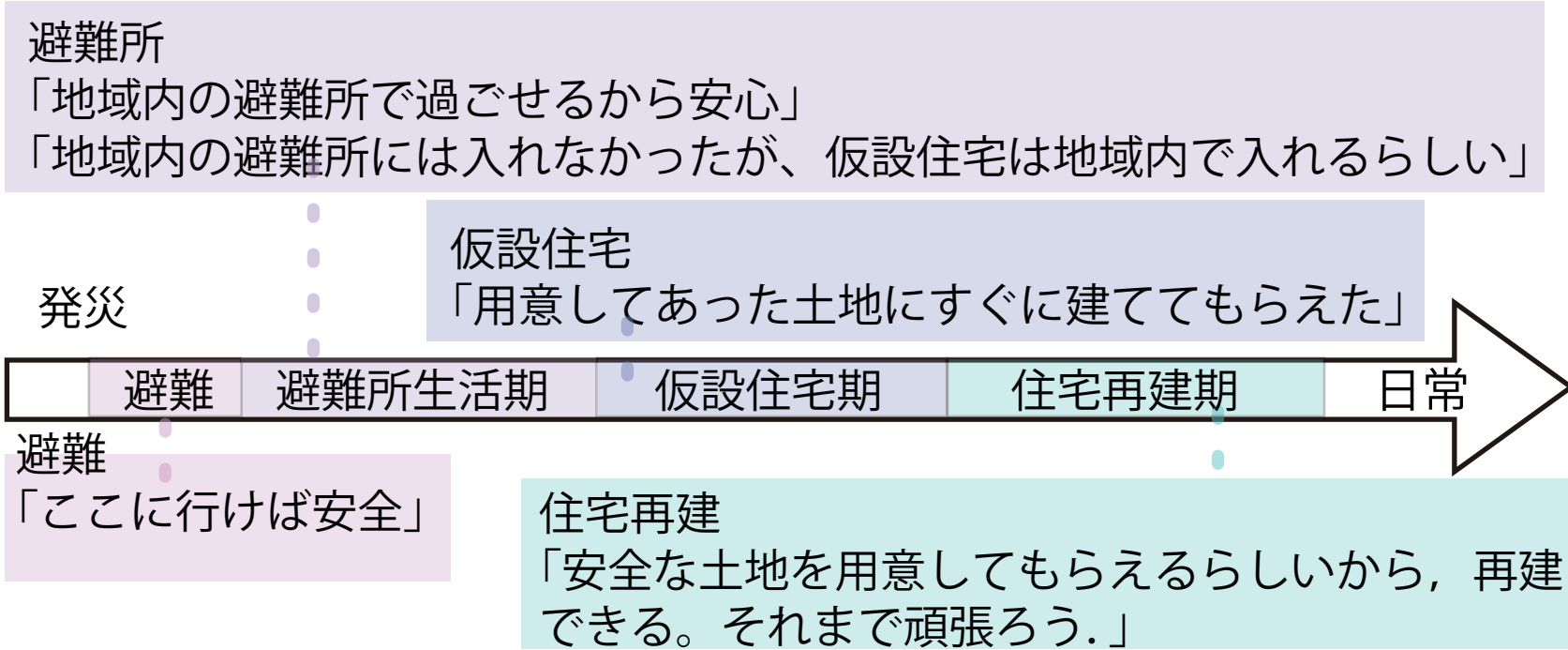
肥料

～白浦を豊かにする人のつながり～



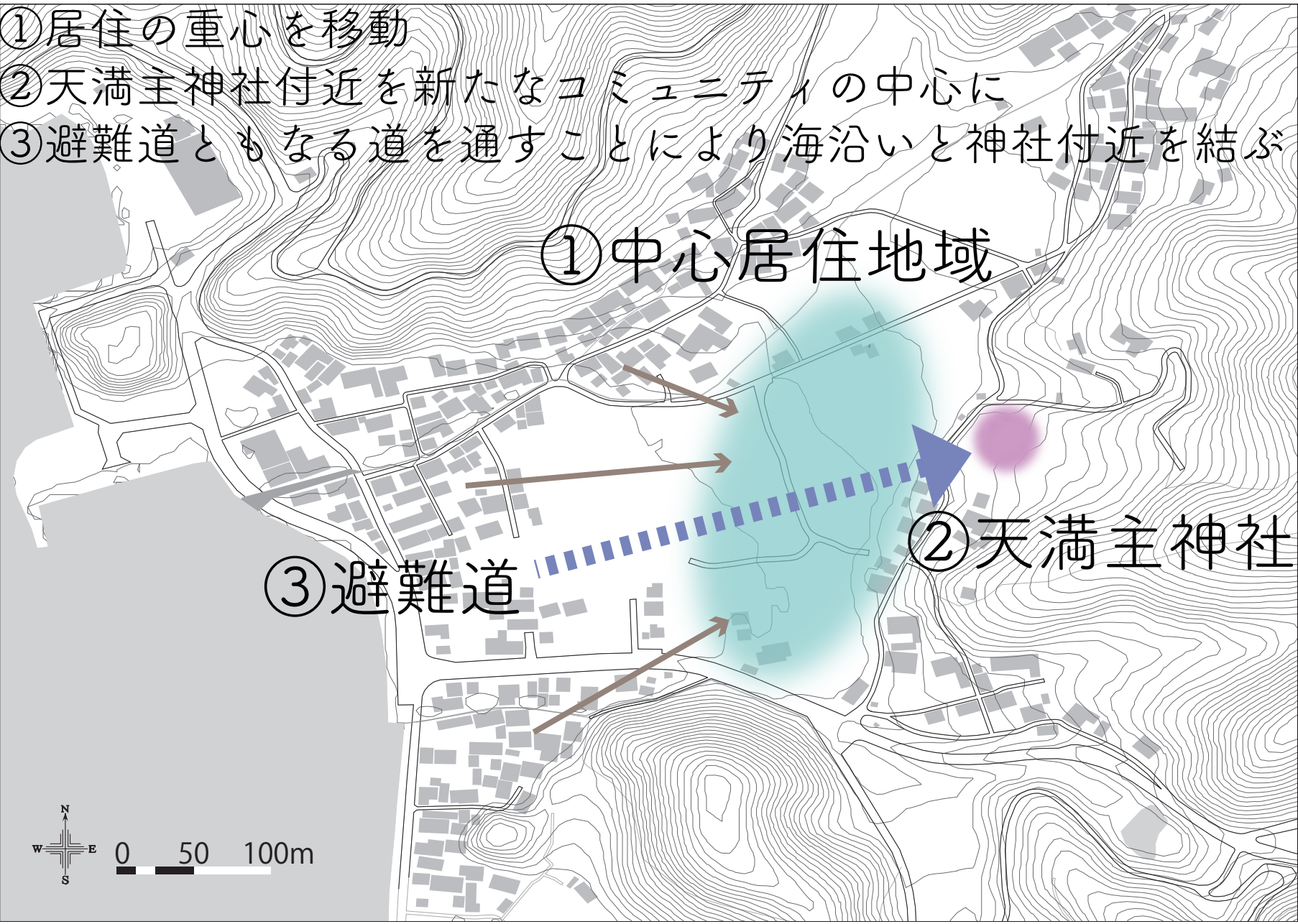
復興の種を蒔く ～将来ビジョンの共有～

地域に残れる，という選択肢を増やす。地域で安全に暮らせる，被災してもここで頑張れる，という将来像が被災前から見えている。
→実際に被災したとき，地域に残るとい選択肢をとりやすくなる。



提案 神社を中心とした地域の再編成

津波浸水域でも土砂災害危険区域でもない、貴重な安全地帯である神社を中心に地域を再編する。



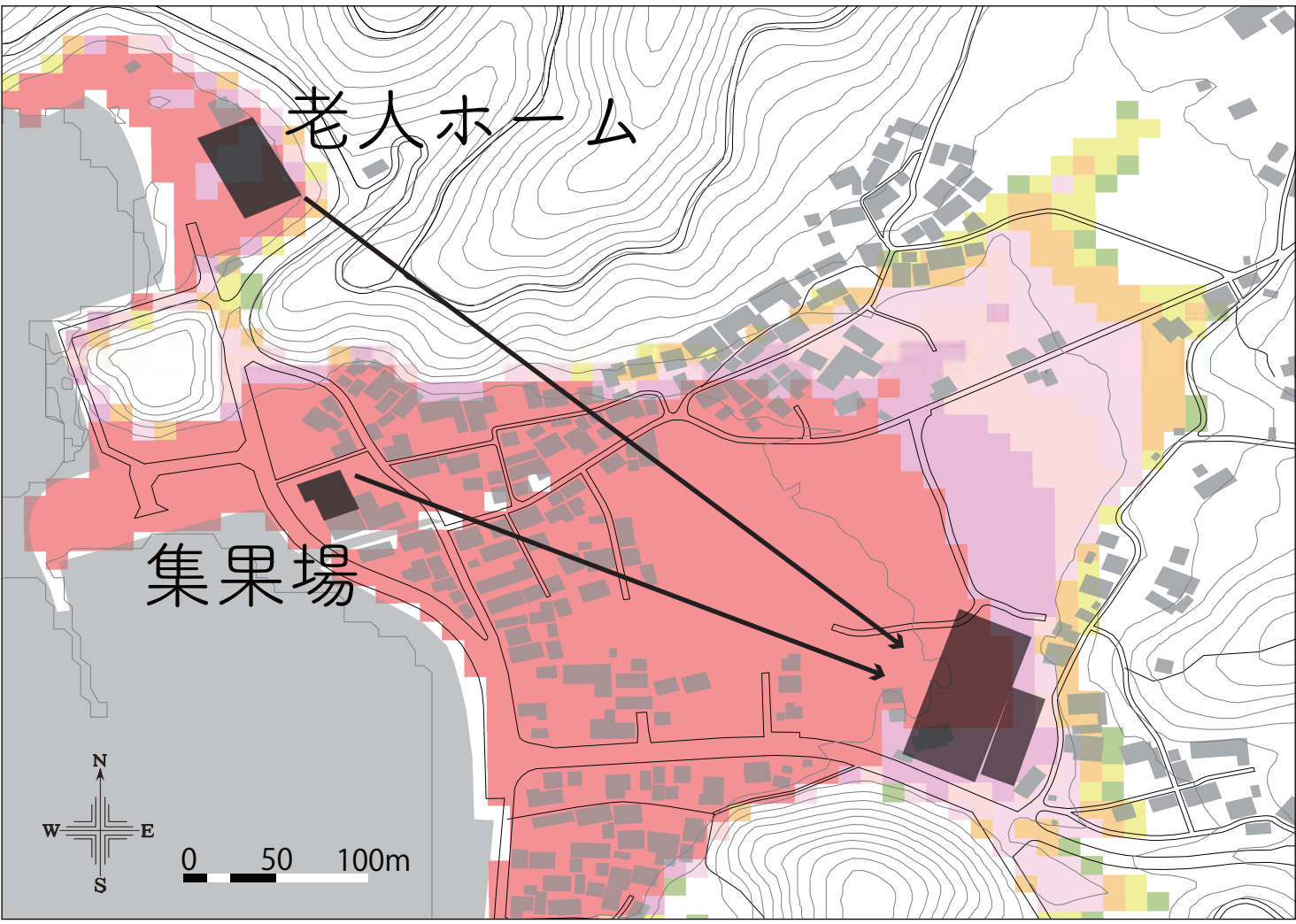
事前復興

避難道・避難場所の事前整備

津波と土砂災害の同時発生といった複合災害のリスクを考慮し、天満主神社へと繋がる新たな避難経路を平地部のみかん畑の中に整備する。既存の一時避難場所に加えて天満主神社を新たな一時避難場所に指定し、孤立が予想される高台の一時避難場所には50人分の1日分の備蓄ができるような東屋を整備する。

老人ホーム・集荷場の移転

現状沿岸部に立地し、津波により大きな被害が予想される地域施設を、予め内陸部に移転させる。
特別養護老人ホーム入居者は身体的に速やかな避難が困難だけでなく、前面は海、背後に急斜面があるため立地的にも一層避難が困難である。移転により災害時にも入所者の安全を確保するとともに、地域の避難所としての利用も可能となる。
併せて集荷場も移転させ、みかん産業の迅速な再開を目指す。



神社前広場の事前整備

事前広場造成時

津波・土砂災害の双方のリスクが少ない天満主神社の前の土地を事前にかさ上げ造成し広場に、平時は祭りの場としても活用、同時に集会所を整備して集会所機能を徐々に移転しつつ、400人分の食料等を備蓄。

仮設住宅建設時

発災直後は神社に一時避難した後、広場にテントを張るなどしてしのぐ。集会所は30～50人程度を収容できる避難所かつ、広域避難者の情報共有の拠点となる。

被災後造成時

復興期には海側も嵩上げ造成し、広場や集会所は被災前の機能に戻る。造成宅地の中心かつ道路軸の交点として人が集い、玉津外に移転した人も時々訪れる地域の拠点に。

事後復興

海側広場の整備

現在、白浦コミュニティセンターがある一角は復興後、広場として整備され、地域運営による直売所と休憩スペースが併設される。直売所には取れたての作物やお弁当、手芸品等が並び、万が一、みかん農業が継続できなくなったとしても、この場所を起点に白浦で暮らしていくためのきっかけとなる場である。休憩スペースはバスの待合所としても機能し、朝は学校に向かう小中学生が集う場、昼間は住民の団場の場となる。

沿岸跡地の利用

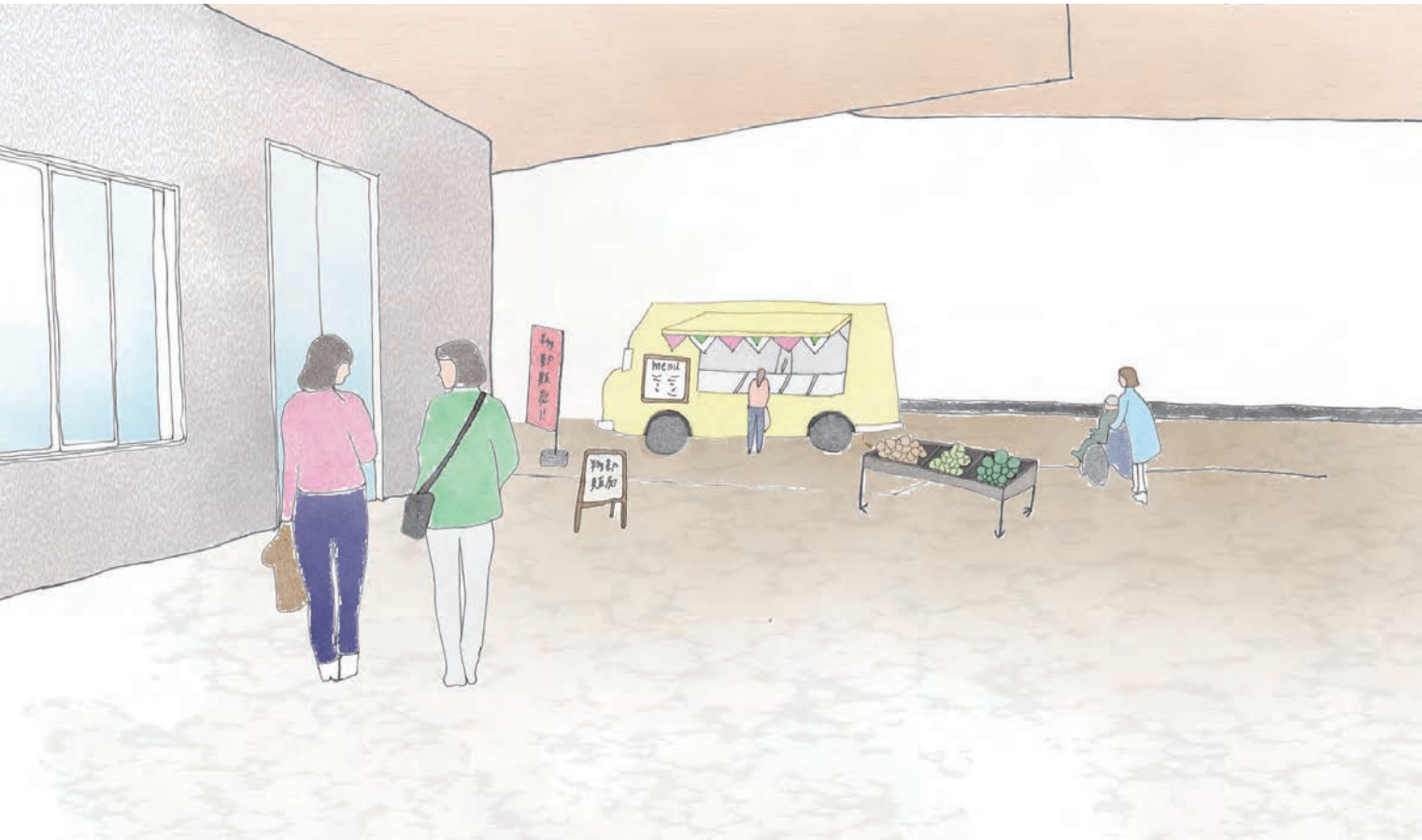
最悪の場合、沿岸部の住宅の大半が津波によって流失してしまう。被災跡地の土地では、いくつかの住宅は再び元の位置に立ち、あるいは新たにゲストハウスや漁具倉庫がつくられる。家々の間等の空いた土地の“隙間”は共同菜園となったり、一方では未利用地のまま残されたり、あるいは植樹がなされたりする。地域の重心は新規宅地側に移ることになるが、海岸広場をはじめ沿岸の土地にも人々の活動が滲みだし、海と山に挟まれた白浦の生活像を保ち続ける。

宅地造成と住宅再建

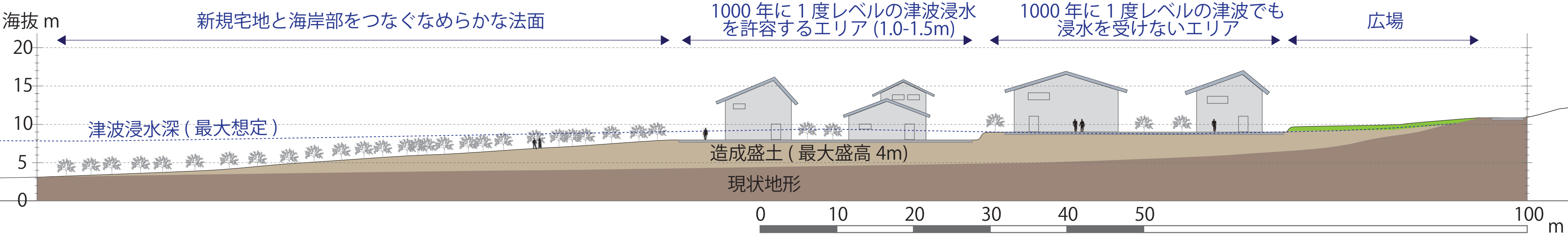
被災後、内陸平地部の畑地を嵩上げし、宅地を造成する。集落に基づいて土地割を決め、元の生活感を損なわないよう空地や共同畑を挿入する。自力再建住宅だけでなく、災害公営住宅を配し、すべての住民が白浦に留まる選択肢を取れるようにする。天満主広場は新規宅地の中で重心となり、住民や就農アルバイトが集う場所となる。事前整備した避難道は、復興後、新規宅地と海岸とを緩やかな傾斜でつなぐ動線となり、海岸へ散歩する人々や学校帰りの小学生が行き交う。



道から海・みかん畑を見る



定期的にやってくる移動スーパー



将来へ